

東大寺諷誦文稿注釈〔四〕

— 123行〜167行 —

小林 真由美

凡例

【影印】

昭和十四年刊複製本『華嚴文義要決 東大寺諷誦文稿』の「東大寺諷誦文稿」を撮影した。上部に、築島裕編『東大寺諷誦文稿総索引』（平成十三年、汲古書院）による行番号を記した。

【解説】

▼原本の状態について。

▽文章の内容について。

【翻刻】

翻字は、『東大寺諷誦文稿総索引』の本文翻刻に準拠する。但し、旧字体・異体字・略字は原則的に現行の新字体にあらためた。あらためなかつた漢字は、「无」「寶」「珠」「尔」「亘(檀)」「卅卅(菩薩)」である。片仮名の上代特殊仮名遣い甲類のコは「古」、乙類のコは「己」、ア行のエは「衣」、ヤ行のエは「エ」、ワ行のエは「エ」と表記した。

○内の算用数字は、本文に引かれた連絡線に付けた番号である。↓は連絡線の始点を、↑は連絡線の終点を示し、①↓ ↑①が一本の連絡線を示す。

□ || 欠損や擦消などにより解読不能の文字

〔 〕 || 解読困難または解読不能だが、先行書の解読によって挿入する文字

┌ ┐ || 章段の文頭を示すと思われる鉤点

□・○ || 廓(囲み線)で抹消された文字

翻刻の行頭の数字は、行番号を示す。

【読み下し文】

翻字、記号等は、【翻刻】に準ずる。

連絡線で挟まれた部分は、（ ）の中に入れて連絡線の番号を記した。例えば、連絡線⑫で挟まれている部分は、（⑫薬師如来を…）とした。

【文意】

主に現代語訳であるが、適宜補足や省略をおこなっている。

【語注】

行頭の数字は、『東大寺諷誦文稿総索引』による行番号である。掲出語句と順番は、読み下し文による。

「中田書」は、中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』の略。

『総索引』は、『東大寺諷誦文稿総索引』の略。

本稿は、博士論文「平安初期仏教と文学の研究―『日本霊異記』と『東大寺諷誦文稿』―」付録「東大寺諷誦文稿注釈」に加筆修正したものであり、「東大寺諷誦文稿注釈（一）―1行〜40行」（『成城国文学論集』第三十六輯、二〇一四年三月）、「東大寺諷誦文稿注釈（二）―41行〜79行―」（同、第三十七輯、二〇一五年三月）、「東大寺諷誦文稿注釈（三）―80行〜122行―」（同、第三十八輯、二〇一六年三月）の続稿である。

麗史顯考對

...

...

久矣 其悠長哉

...

...

...

...

...

...

...

132

131

130

129

128

127

126

125

124

123

142 141 140 139 138 137 136 135 134 133 132

夏以彈之空腸思於慈父冬以登之禪身應於恩世朝燒香款
 者以行三皈五戒誦誦三藏夕燃油捧花而發十八歲誓多誌心加
 牢大乃得半井未讓於三寶希受破衣同於僧尼无愛其身勿貴
 其命珍天宮飛空榜覆之未徒於訊身以吸風生錦鋪帽曰之
 駝衣上衣寒身覆淡檀白底迎仲天牢淚儲七完遊座之夜以銘在之瓦
 麈降伏魚獵之似消馬罪之乐飲食之飲息酒油
 各於世界講說正法者詞无身解 謂大唐新羅日本波斯混淪
 天竺人集 如來一音隨風俗方言合聞 假令此當國方言毛人方言
 飛彈方言東國方言 假令對飛彈國人而麈彈詞合聞而說 如譯語
 通事云 假令南州有八万四千國各方言別 東弗等三洲雅文云天

金瓶之什清平 羅三京 飲食之類 息須補

各於世界講說正法者詞元身解 謂大唐新羅日本波斯混淪

天竺人集 如來一音隨風俗方言合聞 假令此當國方言毛人方言

飛彈方言東國方言 假令對飛彈國人而飛彈詞合聞而說 如譯語

通事云 假令南洲有八万四千國 各方言別 東弗等三洲准之 以天

對大唐人而大唐詞說他准之

對草木而草木詞而說金色

蓮華 千葉本

往詩仙所

七迎共仙物申 餘人不聞知准仙聞 俱談荅花所申

對鳥獸而鳥獸詞而說

初時教時五百青鳥來聞經

大小如雀

鷄鶴雙伏聞法 白狗聞

經 獅猴奉齋物申 仙共彼鳥獸詞而共話 仙說畜生道羅 鳥申久

我先造何業作鳥 仙言汝等皆慳貪嫉妬深 毗波尸仙時 國王儲大

會 參寺見物不奉禮仙不聞法及 慳貪嫉妬始故作鳥 詣寺故今日值遇不

汝等聞經故脫鳥身生天 後作五百阿羅漢 鳥聞仙說 作悲作喜

是名辭元身解 何了了尔 仙知一切衆生言辭 仙音流輪六道 生免受无

162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150

汝等聞經故脫鳥身生天後作五百阿羅漢鳥聞仙說作悲作喜上

是名禪元尋解何了尔仙知一切衆生言禪仙昔流輪六道生免受无

不下受生宿也下り无下宿也下り所

歷生皆忘今成仏得宿命智知過去得詞元尋解知過去所鍾言禪非智

故上天禪中又人辭下至跛文中更禪尔知被禪而同彼說名禪元尋解

何故仙名元上尊仙頂心元見人故名元上後仙頂上尔无物无邊身界中東

頂尔仰臨而不得觀外道以丈尺計不能知故名元上尊

釋迦本縁

護明觀瀾浮生雜象淨飯心清淨仁意摩耶三世仙世兼竹云
心寫七歩大仙人相尖從初相調輪純作三受三付兼竹云
中高人女集此宮世中高

集讀書同情土不道太子教四門居宛觀華中夜出城望飯王七日造附沐

草乳鉢菩提下目代兜申魔三志達太子坐樹下魔王來言可奉宮

次二女奉洒掃次典軍解地脫轉所縛不動力杖折碎趣鹿野園度五比丘

故稱名後初發於輪王位出家入道清淨出家六一丈六尺紫金色菩提樹下成仙道

鹿野園中心

子蘭王目地下卷三

從初切來目

... 依此而不... 外道以丈尺計... 不能知 故名无上尊

釋迦本緣

護明 觀南浮生華家淨飯心清淨仁慈 摩耶 三世仙母 大仙人相 從初相胡輪王能作三女王代 帝高人文集其宮 世中高

集 讀書向博土不通太子教 四門 居苑觀事 中夜出城 四王 敵王七日造附 六軍 沐

草 乳云 鉢云 菩提下 初盤 目代鬼申魔王 志達太子坐樹下 魔王來言可奉宮

次二女奉洒掃 次與軍 解地 脫轉 所縛不動力杖折碎 趣鹿野園度五比丘

故 釋名 從初發 於輪王位出家入道 清淨出家 六云 一文六尺紫金色 菩提樹下成仙道

鹿野園中心云

仁界切云 父殊使 蘭王云目連下卷云 梵帝作搞云 四天王 真物 從劫初未有 像立礼云

曲魯像 云 貧女磨汁 上蘭節 奉緣云

釋伽薩提王子七產 般處 地赤色 草木葉赤 壞劫滅失 成劫本相不失

一野苑雉 潤翼 此野苑無人或有思我子有 帝釋化鶴 天下 至今不燒 云

慈悲德

道 美乃乃尔 伏 气 甸 丁六并 疥 又太个 搔 丁十五 无 欠 目 所 毛 腫合 五 大小便利坐 所 吕 五

【翻刻】(123〜132行)

123 □□□□旦主慕母 造^{トモ}艫^{イホ}設之 母歳々臥病 欲眠時不解帶紐 将奉装時^ハ

124 无託寒温 □起相諍 情耄^ホ魂迷不知依所 形悴^ス、ケ^ケ寐費而无安色 不与妻

125 久安不与客長談

126 母氏〔逝〕荷^ニ棺槨葬松丘 其側作廬 三年自^ミ運土作 墓側^ニハ不及^{モトユヒ}本結

127 鬢髮蓬乱^{フクメタル}ヲモ不収^{カキモ}ヲサ 面^モ无咲色身不受〔香〕衣 服^{キテ}茅ツハナノ花^{フセキ}ヲ防

128 寒 飲粥忍^ヤ饑^ヤ 作^モ墓葬^イ収^イ了 出^リ從廬^ニ到家^ニ礼^ヲ拜^ス言

129 從〔奉別〕父君之^實寶^顏 不聞慈音作久 從奉別母氏 之 紅容 夜不見玉儀而經日月雖世

130 間^ナカニ多男而无似父君^ニ男 雖国内多女而无似母氏^ニ女 乘馬車而遊父君^カ慈山^ニ

131 我父君ハ指^テカ何^カ国^方而往^{ケム}欲^ヒシ物^ヲ儲^ヒ船^楫而遊^ビ母氏^カ悲海^ニ我母氏ハ指^テカ何^カ所

132 隱^給ヒ^ニケム 霜朝雪夕孰^モ 我^モ着^ル衣^ニ 袴^ハカマ 雨々吹風之時^ニハ孰^カ我^ニ□□□□

【読み下し文】(123〜132行)

□□□□旦主、母ヲ慕ヒテ(艫)イホヲ設ク。母、歳々ニ病ニ臥シ、眠ラムト欲スル時ニハ帶紐ヲ解カズ。装ヒ奉ラムトスル時ニハ、寒キ温キニ託^ツクルコト无シ。□起キ相ヒ諍ヒ、情耄^ホレ、魂迷ヒテ依ル所ヲ知ラズ。形悴^スケ、寐費テ、安キ色无シ。妻ト久シク安ミセズ。客ト長ク談ラハズ。

母氏逝キ、棺槨ヲ荷^{ニテ}ヒテ、松ノ丘ニ葬ル。其ノ側ニ廬ヲ作り、三年マデニ自^{ミツカ}ラ土ヲ運ビテ、墓ヲ作ル。側ニハ

本結モトヒビニ及バズ、鬢髮フケダノ蓬乱フクダメルヲモ収カキモツメズ。面オモニ咲マフ色无ク、身ミニ香シキ衣ヲ受ケズ。茅ツバナノ花ヲ服キテ寒サヲ防フセギ、粥シユヲ飲ムミテ饑ヤブキヲ忍ビ、墓カミヲ作りテ葬リ収カキメ了リヌ。廬イロ従リ出テ家ニ到リテ礼拜シテ言ク、

父君ノ寶顔ニ別レ奉リテ従リ、慈シビノ音ヲ聞カヌコト久シク作りヌ。母氏ノ紅容ニ別レ奉リテ従リ、夜ニ玉ノ儀ヲ見ズシテ日月ヲ経タリ。世間ヨノナカニ男多シト雖モ、父君ニ似タル男无シ。国ノ内ニ女多シト雖モ、母氏ニ似タル女无シ。馬車ニ乘リテ父君ガ慈山ニ遊バムト欲ヒシモノヲ、我ガ父君ハ何レノ国ヲ指シテカ往ニタマヒケム。

船楫フネヲ儲ケテ母氏ガ悲海ニ遊バムト欲ヒシモノヲ、我ガ母氏ハ何レノ所ヲ指シテカ隠レタマヒニケム。

霜ノ朝、雪ノ夕、孰タレモ我ガ衣袴イロモハカマヲ着セタマヒジ。雨アメ々リ風吹ク時ニハ、孰タレカ我ガ二□□□

【解説】（123～132行）

▼影印のとおり擦消されている箇所ので、判読できない文字が多い。

▽且主の亡き母への孝と亡き父母への慕情を述べる文章。前段の追善供養の文章に関連して作成された文章と思われる。123～128行は、且主が親の死後三年間廬を作り親の喪に服したという内容。『礼記』の服喪の儀礼に一致する。123～126行は、『後漢書』蔡邕伝に一致する部分が多い。「邕は性篤孝なり。母常トシつて滞病トシせること三年。邕、寒暑の節変に非ざる自りは未だ嘗て襟帯を解かず。寢寐せざること七旬。母卒して冢ツカの側に廬す。動靜に礼を以つてす。兔有りてその室の傍に馴なつれ擾なげり。又た木に連理を生なせり。遠近之を奇とす。多く往きて観る」（『後漢書』卷第五十下、蔡邕伝）。小峯和明氏は、「『孝子伝』系」に、親の亡骸を埋葬するために、庵を結んで墓を作る例があることを指摘している（『中世法会文芸論』56頁、笠間書院、二二〇〇九年）。129行～132

行は、且主の立場から亡父母への慕情を修辭的な表現をもつて述べている。

【文意】（123～132行）

且主は、母を慕つて庵を作った。

且主の母は、年老いてから歳々病に伏すようになり、且主は眠るときには帯紐を解くことがなくなった。身支度をする時には、寒暖を気にすることがなくなった。起きては人と諍うようになり、心はうつろになり、魂は迷い、依り所がなくなった。身体はやつれ、やせ衰えて、落ちついた様子がなくなった。妻と久しく安らぐことができなく、客と長く語らうこともなかった。

母が亡くなり、且主は棺を担いで、松の丘に葬った。その傍らに小屋を造り、三年の間自分で土を運んで墓を作った。髪はぼうぼうのまま結い上げず、顔に笑みを浮かべず、良い衣服を身につけることがなかった。粗末な布で寒さを防ぎ、粥を飲んで飢えをしのび、墓を作って葬りおさめおわった。小屋を出て家に帰つて礼拝して言う。

父君の宝顔にお別れ申し上げてから、慈しみのお声を聞くことがなくなって久しくなった。母氏の紅容にお別れ申し上げてから、夜に玉のようなお姿を見ることがなくなって日月が経った。世の中に男は多いといっても、父君に似た男性はいない。国の中に女は多いといっても、母氏に似た女性はいない。馬車に乗つて父君の慈愛の山に遊ぼうと願うのだが、我が父君はこの国を指してお往きになってしまったのだろうか。船楫を設けて母氏の慈愛の海に遊ぼうと願うのだが、我が母氏は何処を指してお隠れになってしまったのだろうか。霜の朝も、雪

の夕も、誰も私に衣服を着せてくださらない。雨が降り風が吹くときには、誰が私に（以下不明）。

【語注】（123～132行）

123 〔トモ 艦）イホ 「艦」は船のとも、へさき。「艦」は「廬（イホ）」の誤りと思われる。原文に「艦」の傍に「トモ」とありその外側に「イホ」と書いてあることについて、中田書釈文註記（二七一頁）に、「艦トモ」を消して、「イホ」とあるべきことを思いながら、漢字をしたためなかつたものと考えられる」とある通りである。朗読用の原稿であったため、仮名の訂正をするだけで事足り、漢字を書き直す必要がなかつたのである。

124 悴ススケ 「悴」は、いたむ、やつれるの意。「ススク」は本書の他に用例が見られない語。

126 棺槨 ひつぎ。棺は遺体をじかにおさめる内棺、槨は外棺。

126 松ノ丘 松の丘は、墓場を象徴する表現。21行参照。

126 廬 『礼記』に、父母の喪に服するときは「椅廬」を建てて喪を過こすとある。「父母の喪には、倚廬に居り塗らず、苦に寝ね出に枕し、喪事に非ざれば言わず。君は廬を為りて之を宮す。大夫・士は之をあは禴す」（『礼記』卷第二十二、「喪大記」）。

126 ミツカ 「上代にも多くある副詞の用例であろう」（中田書225頁）。『東大寺諷誦文稿』には、名詞の用例もある。275行参照。

126 モトユヒ 髪モトユヒの髻を束ねる糸や紐のこと。

127 鬢髪ノ蓬乱メルヲモ 「鬢髪」は、鬢（頭の左右の側面の髪（毛）の部分の髪、または頭髪のこと。「蓬髪」は、乱れた髪のこと。「ふくだむ」は、乱れてそそげ、ふくらむこと。

127 収メズ 原文に「不収カキモヲサメス」と仮名書きされている。否定表現「…モ…ズ」の形は、「訓点には例を見ないもの」（築島裕）『東大寺諷誦文稿』小考、『国語国文』第二十一巻第五号、一九五二年五月）という指摘があり、和文的な表現を用いていると思われる。182行にも「不寝イモネ」の例がある。

127 茅ノ花 チガヤ。イネ科の多年草。粗末な衣服で喪に服す孝子の表現としたのであろう。『礼記』には「斬衰」の喪に服する時、喪服として「苴（実のある麻）」の服を身につけるとある（『礼記』卷第三十七、間伝）。

128 粥ヲ飲ミテ 「故に父母の喪には、既に殯して粥を食ふ」（『礼記』卷第三十七、間伝）。

128 饑キヲ 24行にも「飢ヤワシト」と見える。

129 玉ノ儀 空海の文章にも、母の姿を「玉儀」と述べる表現がみられる。「豈図らんや、蒼天我が親を奪つて、玉儀月城にはいらんことを」（「為忠延師先妣講理趣経表白文」）、「統遍照發揮性靈集補闕鈔」卷第八）。

129 世間に男多シト雖モ 『東大寺諷誦文稿』に「世間」は十三回使用されているが、訓があるのはこの一例のみ。『萬葉集』の相聞や挽歌に似た発想が見られる。「玉梓の道行き人もひとりだに似てし行かねば」（「柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌」）『萬葉集』卷第二、挽歌、二〇七）、「人多に国には満ちてあぢ群の通ひは行けど我が恋ふる君にしあらねば」（「崗本天皇御製一首并短歌」同、卷第四、相聞、四八五）。

132 衣袴 ころもとはかま。「己」は「コ」の乙類の片仮名。

【翻刻】(133～139行)

- 133 夏以蟬之空腸思於慈父冬以蚕之裸身恋於恩母朝燒香設
 134 齋以行三帰五戒諷誦三蔵 夕燃油捧花而発十善八戒 稽首諸仏加以
 135 牢タマ得半升米 讓於三寶 希受破衣周於僧尼 无愛其身勿貴
 136 其命 諸天雲飛ル零精粳之米繼於飢身积王吹風生錦繡粧ヨソヒ
礼拝入廬而坐 其夜父墓側芝草五茎 母墓辺五茎 又退五茎ノ連理樹
 137 襲キ七寒身 羅漢控白鹿迎仲天 牢跋儲七宮遊虚空 護法歛喜惡
 138 魔降伏 魚獵之侶消弓 羅之樂飲食之類 息泊浦

139

之想

丁蘭 須後 金孝子

【読み下し文】(133～139行)

夏ハ蟬ノ空シキ腸ヲ以テ慈父ヲ思ヒ、冬ハ蚕ノ裸ナル身ヲ以テ恩母ヲ恋フ。朝ハ香ヲ焼キ、齋ヲ設ケテ、以テ三帰五戒ヲ行ジテ三蔵ヲ諷誦ス。夕ニハ油ヲ燃シ、花ヲ捧ゲテ、十善八戒ヲ発シテ諸仏ニ稽首ス。加以、牢サカニ半升ノ米ヲ得テハ三寶ニ讓リ、希ニ破レタル衣ヲ受ケテハ僧尼ニ周ハス。其ノ身ヲ愛シムコト无ク、其ノ命ヲ貴ブルコト勿シ。

諸天ハ雲ヲ飛バシテ、精ケタル粳ノ米ヲ零リテ飢エタル身ヲ継ギ、积王ハ風ヲ吹キテ、錦繡ノ粧ヲ生ジテ寒イタル身ニ襲キ、羅漢ハ白鹿ヲ控エテ仲天ニ迎ヘ、牢跋ハ七宮ヲ儲ケテ虚空ニ遊ブ。護法ハ歛喜シテ悪魔ヲ降伏セリ。

礼拝シテ盧ニ入りテ坐ス。其ノ夜、父ノ墓ノ側ニ芝草五莖アリ。母ノ墓ノ辺ニ五莖アリ。又退キテ五莖ノ連理樹アリ。

魚獵ノ侶、弓ヲ消シ、羅ノ樂、飲食ノ類、浦息泊、之想。

丁蘭、須悽、余ノ孝子。

【解説】（133～139行）

▽133～139行 斜線で抹消されている。仮名書きは少なく、「牢タマ」「粧ヨツヒ」「襲キセ」の三箇所のみ。136行と137行の間に一行書き込みがある。136行「其命」までは父母の追善のための献身的な行について。138行「魔降伏」までは諸天諸神を賛嘆している。138～139行は文意不明。139行左傍の小字は孝子の名を列挙している。

【文意】（133～139行）

夏は蟬の腹の空洞のような空しさをもって父を思い、冬は繭のない裸の蚕のような身をもって恩母を恋い慕う。父母の為に、朝は香を焚き、齋を設けて、三帰五戒の行をおこなって経典を読み上げる。夕べには灯火をともし、花を捧げて、十善八戒を唱え、諸仏に礼拝する。その上に、たまさかに半升の米を手に入れては三宝に捧げ、まれに破れた衣をいただいては、僧尼に差し上げる。自分の身をいたわることもなく、その命を責ぶこともない。

諸天は雲を飛ばしてよく搗いた白いうるち米を雨降らし、飢えた身の命をつないでくださる。釈尊は風を吹か

せて錦繡の衣装を生じ、凍えた身に着せてくださる。羅漢は白い鹿を控えて中天に迎え、牢跋は天空に七宮を設けて虚空に遊ぶ。護法は歓喜して、悪魔を降伏する。

且主は礼拝して庵に入つて坐す。その夜、父の墓の側に芝草が五茎生えていた。母の墓の辺にも五茎生えていた。また後ろのほうには五茎の連理樹が生えていた。

魚獵之侶消弓 羅之樂飲食之類、浦息泊、想。

丁蘭、須悽、余ノ孝子。

【語注】（133～139行）

133 蟬ノ空腸 蟬のオスの成虫の腹部には器官が拡大した共鳴室がある。

134 齋 食事を供養すること。

134 三帰五戒 仏教信徒となるための根本条件。三宝（仏・法・僧）に帰依し、五戒（不殺生・不偷盜・不邪婬・不妄語・不飲酒）を受けること。

134 三蔵 三蔵は経・律・論の三種の仏教聖典。一切の仏教書のこと。

134 十善八戒 在家信者が守るべき十善戒（不殺生・不偷盜・不邪婬・不妄語・不惡口・不両舌・不綺語・無貪・無瞋恚・正見）と八戒齋（六齋日に守る八つの戒）。

134 加シカノミナラス以クマ 「加シカノミナラス以クマ」は、觀智院本『類聚名義抄』に「加復シカノミナラス——之同——以同」（僧上八四）とある。

135 牢クマサカニ 「稀タマ」（249行）の例も見える。

136 連理樹 二つの株の木が相連なって一つになった木。祥瑞のしるしとされる。『後漢書』蔡邕伝では、孝子の奇瑞として生じている。【解説】(123～132行) 参照。

137 羅漢 阿羅漢。小乗仏教の聖者。

137 牢跋 兜率天で弥勒菩薩のために善報堂を造ったという牢度跋提のことであろう。『西大寺資財流記帳』弥勒堂に「羅漢像一体」「牢度跋提神像一体」が記されている。「爾の時此の宮に一大神あり、名は牢度跋提、即ち座より起ちて遍く十方仏を礼し、弘誓の願を発す。若し我が福德、応に弥勒菩薩の為に善法堂を作るべくんば、我が額上に自然に珠を出さしめよ。既に発願し已れば、額上に自然に五百億の宝珠を出す」(『仏説弥勒菩薩上生兜率天経』)。

137 護法 護法神か。

139 丁蘭 孝子の名。母が亡くなった後、木を刻んで母として、これに仕えた。(陽明本・船橋本『孝子伝』上巻) 87行に既出。

139 須椽 不明。

【翻刻】(140～154行)

140 [名於世界 講説正法者詞无碍解 謂大唐 新羅 日本 波斯 混嶮

141 天竺人集 如来一音随風俗、方言令聞 仮令⑱↓此当国方言 毛人方言

142 飛驒方言 東国方言 仮令对飛驒国人而飛驒詞⑳↓令聞↑㉑而説云 如訳語

- 143 通事云 假令南州有八万四千国 各方言别 東弗等三州准之 六天
- 144 ↑①9对大唐人而大唐詞説 他准之 对草木而草木辞而説者金色 蓮華千茎本 フサ 往詣仏所
- 145 七匠与仏物申 余人不聞知唯仏聞知 給ヒテ 俱談 カタラヒ給ヒ 答花所申 对鳥獸而鳥獸辞而説者
- 146 初時教時五百青鳥來聞經②1 ↓ 大小如雀 オホサ 鷄鶴双伏聞法 白狗聞
- 147 經 獼猴奉蜜物申 仏与彼鳥獸詞而共話 ↑ ②1 仏説畜生道 難 多 鳥申ク
- 148 我先造何業作鳥 仏言汝等昔慳貪嫉妬深 毘波尸仏 時 国王儲大 无道
- 149 会 敬等 參寺見物 ヲ耳 不奉礼仏 不聞法反 慳貪嫉妬故作鳥 詣寺故今日值遇仏
- 150 汝等聞經故脱鳥身生天 後作五百阿羅漢 鳥聞仏説 乍悲乍喜 云云上
- 151 是名辞无碍解 何ソイカニ 仏知一切衆生言辞 仏昔流輪六道生死 受无
- 152 不トイフ受 給 生 宿 給ヤトリ 无不トイフ宿 給ヤトリ 給所
- 153 歷生皆悉 今成仏得宿命智知過去 得詞无碍解 知過去所経言辞 出辭
- 154 故上ハ天辞中ハ人辞 至 下岐ハフ虫辞ニ知ヲ 彼カ辞②2 ↓ 而同彼説 ↑ ②2 名辞无碍解

【讀み下し文】 (140〜154行)

各世界ニ於テ、正法ヲ講説スル者ハ、詞シム无碍解ナリ。謂ク、大唐、新羅、日本、波斯、混嶮、天竺ノ人集レバ、如来ハ一音ニ風俗ノ方言ニ随ヒテ聞カ令メタマフ。假令バ タトヘ (①9此当国ノ方言、毛人ノ方言、飛驒ノ方言、東国ノ方言、假令バ飛驒国ノ人ニ対ヒテハ、飛驒国ノ詞ヲモチテ (②0聞カ令メテ)、説キタマフ云。訳語通事ノ如

シ。假令ハ南州ニ八方四千国アリ、各方言別ナリ。東弗等ノ三州ハ之ニ准フ。六天）大唐ノ人ニ対ヒテハ、大唐ノ詞ヲモチテ説キタマフ。他ハ之ニ准フ。

草木ニ対ヒテハ草木ノ辞ヲモチテ説キタマフ。金色ノ蓮華フサ千茎ノ本アリ。仏ノ所ニ往キ詣リテ七匠シテ仏ト物申シキ。余人ハ聞キ知ラズ。唯仏ノミ聞キ知り給ヒテ、俱ニ談カケラヒ給ヒ、花ノ申ス所ニ答ヘタマフ。鳥獸ニ対ヒテハ、鳥獸ノ辞ヲモ説キタマフトイヘリ。

初時教ノ時ニ、五百ノ青キ斑アル鳥飛ビ来リテ経ヲ聞ク。(21)大小雀オホサノ如シ。鷄鶴双ビ伏シテ法ヲ聞ク。白キ狗経ヲ聞ク。獼猴、蜜ヲ奉リテ物申ス。仏ト彼ノ鳥獸ノ詞ヲ共ニ話シタマフ。) 仏、畜生道ノ難多キコトヲ説キタマフ。鳥申サク、我先ニ何ノ業ヲ造リテカ鳥ト作レルトイフ。仏ノ言ハク、汝等ハ昔、慳貪ニシテ嫉妬深カリキ故ニ鳥ト作りキ。毗波尸仏ノ御時ニ、国王、无遮ノ大会ヲ儲ケシニ、汝等寺ニ參レドモ、物ヲノミ見テ、仏ヲ礼シ奉ラズシテ、法ヲ聞カズシテ、反リテ、慳貪嫉妬ナルガ故ニ鳥ト作レリ。寺ニ詣リシガ故ニ、今日仏ニ値遇シタテマツレリ。汝等経ヲ聞ケルガ故ニ、鳥ノ身ヲ脱レテ天ニ生マレ、後ニ五百阿羅漢ト作ラムトノタマフ。鳥仏ノ説ヲ聞キテ、乍イハ悲シビ乍イハ喜ブ云云。以上。

是ヲ辞无碍解ト名ヅク。

何イカニソ仏ハ、一切衆生ノ言辞ヲ知リタマフヤ。仏ハ昔、六道生死ニ流転シテ、受ケ給ハズトイフ生无ク受ケ給ヒ、宿ヤドリ給ハズトイフ所ナク宿ヤドリ給ヒタリ。生ヲ歴シコト皆悉ツクシタリ。今、仏ト成リテ宿命智ヲ得テ、過去ヲ知レリ。詞无碍解ヲ得テ、過去ニ経シ所ノ串習、言辞ヲ知レルガ故ニ、上ハ天ノ辞、中ハ人ノ辞、下ハ蚊ハフ虫ノ辞ニ至ルマテ彼カ辞ヲ知ルヲ、(22)彼ト同ジク説キタマフ) 辞无碍解ト名ヅク。

【解説】（140～154行）

▽140～154行 「詞（辞）无碍解」（仏菩薩が持つ力の一つで、諸方域の言語に通達する能力）について述べている。144行までは、正法を説くものは詞无碍解の能力があり、全世界の国々、日本の各地方の言語に通じていること。144行と145行は、仏は草木や鳥獸の言葉もわかり、蓮華とも語り合えること。146行～150行は、初時教のときに五百羽の鳥が仏の経を聞き、自分たちが畜生に生まれたわけをたずねたという説話を述べる。151行～152行は、仏がどうして詞无碍解の力をもっているのかという問答。

【文意】（140～154行）

それぞれの世界で正法を講説する仏の能力は、詞无碍解である。大唐、新羅、日本、波斯、混嶮、天竺の人々が集まる時は、如来は一度にそれぞれの言葉でお話をお聞かせになる。たとえば、（この国の方言、飛驒方言、東国方言である。飛驒の国の人にむかつては飛驒の国の方言で（お聞かせになる）お話をなさる。まるで通訳のようである。たとえば南瞻部洲には八方に四千の国があり、それぞれの言葉がある。東弗等などの三州は、これに準じて述べる。六天も同じ。）大唐の人にむかつては、大唐の言葉をもって説きたまう。他もこれに準ずる。仏は、草木にむかつては草木の言葉をもってお説きになる。金色の蓮の華が千本あった。仏のところに参詣して七めぐりして仏にお話を申し上げた。その言葉は他の人々にはわからない。ただ仏だけがわかりになり、共に語らいたまい、花の申すことにお答えになった。仏は、鳥獸にむかつては、鳥獸の言葉をもお話になる。

初時教のときに、五百の青い斑のある鳥が飛んできて仏の経を聞いた。（大きさは雀ほどであった。鶏や鶴が並んで伏して法を聞いた。白い犬も経を聞いた。大猿は、蜜を捧げて物を申し上げた。仏はそれらの鳥獣の言葉を共にお話になった。）仏は、畜生道の難の多いことを説いた。鳥が、私は先の世にどんな業をつくって鳥として生まれたのかと申し上げた。仏は、お前たちは昔の世で、慳貪で嫉妬深かったので鳥として生まれたのだとおっしゃった。毗波尸仏の世に、国王が無遮の大会を設けた。お前たちはその寺に詣でたが、物ばかりを見て、仏に礼拝せず、説法を聞かなかつた。それどころか慳貪で嫉妬深かつたので、鳥になつたのだが、それでも寺に詣でたという功德のおかげで、この世で今日、仏に遭うことができたのだ。そしてお前たちは今度は経を聞いたので、来世は鳥の身を脱して天に生まれ、後の世には五百の阿羅漢となることができるだろう。鳥たちは、仏のお話を聞いて、悲しんだり喜んだりした。

これを辞无碍解という。

どうして仏は、一切衆生の言葉をご存知なのだろうか。仏は昔、六道に生死流転して、受けないという生はなく、どの世界にもくまなく宿らないという世界はなかつた。あらゆる生という生をおめぐりになり尽くした。今、仏となつて、宿命智の能力を得て、自分の過去世を知ることができた。詞无碍解の能力を得て、過去に経たあらゆる世界の習慣と言葉を知り、上は天の言葉、中は人の言葉、下は這う虫の言葉にいたるまでそれぞれの詞がおわかりになつた。（それぞれと同じ言葉でお話をなさる。）この能力を辞无碍解と名づける。

【語注】（140～154行）

140 詞無碍解 辞無碍解とも。仏や菩薩の持つ、四種の自由自在で障碍のない理解表現能力である四無碍解の一つ。詞無碍解は、諸地域の言語に通達していること。「諸の無碍解は総説するに四あり、一に法無碍解、二に義無碍解、三に詞無碍解、四に弁無碍解。(中略) 方言の詞を縁するを立てて第三となす」(『阿毘達磨俱舍論』卷第二十七)。

140 波斯 波斯国。ペルシヤ。現在のイラン。

140 混崑 崑崙山。中国西方にあると考えられた霊山。

141 天竺 インド。原文は「天竺」。

141 仮令ケトヘバ 中田書は「仮令ケトヒ」、『総索引』は「仮令(へハ)」と読み下している。「仮令」はもしも、かりにの意で、「タトヒ」と訓ずる語であるが、この文脈では「例を挙げると」の意にとれる。「タトヘバ」と訓むつもりで「仮令」と表記したものと思われる。「タトヘバ」はこの用法が平安時代の和文の中で用いられるのは、訓読調の場面である(吉田金彦他編『訓点語辞典』東京堂出版)。

141 毛氏ノ方言 「えみし(蝦夷)」の方言。蝦夷は、上代の中央政府に属さない東日本の住民。
142 訳語通事 通訳。

143 南州 須弥山の四方の海に在る四大洲のうちの、南瞻部洲。閻浮提ともいい、現実の人間の世界をさす。

144 東弗 東弗婆提。東勝身洲とも。四大洲のうちの、東方にある大陸。

144 六天 三界(欲界・色界・無色界)のうち、欲界に属する六天。四天王衆天・三十三天・夜摩天・觀史多天・樂變化天・他化自在天。

- 146 初時教 三時教の第一。法相宗では、仏一代の教を三時に判じ、第一時有教・第二時空教、第三中道教とする。第一時有教が初時教で、仏が初めに鹿野苑で外道凡夫の二乗のために説いた小乗の教。
- 145 五百ノ青キ斑ノ鳥 仏伝によると、釈尊が菩提樹下で成道した後、五百の群青鳥が右邊して空中を旋回した。
- 146 経ヲ聞ク 五百の青い鳥が経を聞く説話は未見だが、鳥獣が説法を聞いて天に生まれる説話が多い。例えば五百の雁が仏の説法を聞いて忉利天に生まれ、須陀洹果を得たという説話がある（『賢愚経』卷第十三、『撰集百緣経』卷第六）。
- 147 獼猴 サルの一種。おおざる。
- 148 畜生道 衆生が輪廻する六道のうち、三悪道（餓鬼・畜生・地獄）の一つ。
- 149 毗波尸仏 過去七仏の一。39行に既出。
- 149 嫉妬 原文は「嫉妬」。
- 149 无遮ノ大会 無遮会。国王が施主となり、僧俗貴賤のへだてなく、すべての者を供養する大会。アシヨカ王に始まったといわれる。
- 152 宿り給ヒタリ 六道のあらゆる生き物にお生まれになった。「宿生」は過去世のこと。
- 150 阿羅漢 137行「羅漢」参照。
- 151 辞无碍解 詞无碍解に同じ。
- 152 宿命智 宿命智通。六道の一つ。自他の過去世をすべて知ることができる能力。

【翻刻】（155～156行）

- 155 何故仏名无上尊 仏頂ヲ无見人故名无上 従仏頂上ニ无物 无边身昇菩薩三界
 156 頂ニ仰臨而不得觀 外道以丈尺計トモハカリ不能知 故名无上尊

【読み下し文】（155～156行）

何故ニ仏ヲ无上尊ト名ヅク。仏ノ頂ヲ見シ人无キガ故ニ无上ト名ヅケタテマツル。仏ノ頂従り上ニ物无シ。无边身ノ菩薩ハ、三界ノ頂ニ昇リテ仰キ臨ムトモ、觀タテマツルコト得ズ。外道ハ丈尺ヲ以テ計リシカドモ、知ルコト能ハズ。故ニ无上尊ト名ヅケタテマツル。

【解説】（155～156行）

▽155～156行 斜線で抹消されている。无上尊の名称の由来についての問答。出典不明。『観無量寿經』第十三観に、「無量寿仏（阿弥陀仏）の身量无边なれば、これ、凡夫の心力の及ぶところにあらず」とある。

【文意】（155～156行）

なぜ、仏を無上尊と名づけ申し上げるのか。仏の頭頂を見たものがいないので、無上と名づけ申し上げるのである。仏の頭頂より上に物はない。无边の身の菩薩が、三界の頂上に昇って仏を仰ぎ見ても、見申し上げることはできない。外道は物指で計ろうとしたけれども、仏の身の丈を知ることではできなかった。そのために、無上尊

と名づけ申し上げるのである。

【翻刻】(157〜167行)

- 157 釈迦本縁観閻浮生誰家 淨飯心清淨仁慈 摩耶三世仏母 從劫初相嗣輪王 絶作三世人王代
- 158 護明云 白象云 右脇云 七歩云 大仙人令相云 哭云 世中高人女集此宮 世中高才系竹云
- 159 集 読書問博士不通太子教云 四門云 居苑觀華云 中夜出城云 四王云 六年七日速爾 沐云
- 160 草云 乳云 鉢云 菩提下云 目代鬼申魔王御監 悉達太子坐樹下云 魔王来言可本宮
- 161 次二女奉 洒掃云 次興軍云 所縛不動刀杖折碎静地脱靴 趣鹿野蘭度五比丘云
- 162 故云称名 從初發云 捨輪王位出家入道從天來云誕生高云 清淨出家六云 一丈六尺紫金色 菩提樹下成仏道
- 163 鹿野蘭中四云
- 164 弘昇切云 文殊使云 梵帝作橋云 四天王天貢物從劫初未有 像立礼云
- 165 曲腰像云 貧女腐汁云 奉縁云
- 166 釈仏薩埵王子七産 般遮 地赤色 草木葉赤 壞劫滅失 成劫本相不失
- 167 一野火烧雉 潤翼此野我生人成有恩我子有 有我眷 帝釈化鴿ハト 至今不焼云

【読み下し文】(157〜167行)

釈迦ノ本縁

閻浮ヲ觀ズルニ、誰ガ家ニカ生レム。淨飯、心ハ清淨ニシテ仁慈ナリ。摩耶ハ三世ノ仏母ナリ。

〔護明〕云。白象云。右脇云。七歩云。大仙人ニ相セシム云。哭云。劫初從リ輪王相ヒ嗣ギ、絶エテ三世ノ人王ノ代ト作ル。

世ノ中ノ高キ人ノ女、此ノ宮ニ集ル。糸竹云。世ノ中ノ高キ才集ル云。書ヲ讀ミテ、博士ニ問ヘドモ通ゼズ。太子教ヘタマフ云。

四門云。苑ニ居テ華ヲ觀ル云。中夜ニ城ヲ出ヅ云。四王云。飯王七日迷ヒ悶エタマフ云。

六年云。沐云。草云。乳云。鉢。菩提ノ下云。(御監)目代鬼、魔王ニ申ス。悉達太子樹下ニ坐ス云。魔王來リテ本ノ宮ニアル可シト言フ。

次ニ二女ノ洒キ掃キ奉ル云。次ニ軍ヲ興ス云。地ニ僻レ腕轉シ、縛ラレテ動カズニ刀杖折レ碎ク云。鹿野蘭ニ趣キテ五比丘ヲ度シタマフ云。

故ニ云ク、(称名)初發從リ云。輪王ノ位ヲ捨テテ出家人道ス。天從リ來ル云。誕生高云。清淨出家六云。一丈六尺紫金色、菩提樹ノ下ニテ仏道ヲ成ス。鹿野蘭中四云。

〔仏切〕ニ昇ル云。文殊ノ使云。梵帝橋ヲ作ル云。于闐王云。目連下リ告グ云。四天王天、物ヲ貢グ。劫初從リ有ラズ。像立チテ礼ス云。〔像〕(尺二)腰ヲ曲ゲル云。

〔貧女ノ腐汁〕ヲ奉リシ縁云。

釈仏、薩埵王子。七、産マル。般遮、地、赤色ナリ。草木ノ葉赤シ。

壞劫ニ滅失ス。成劫ハ本相ニシテ失セズ。

一タヒ野火ニ焼ケシ雉ニ、翼ヲ潤シキ。此ノ野ニ我生レテ人ト成リシ恩有リ。我ガ子有リ。我脊^{スガ}有リ。帝釋^{ハト}鳩^{バト}ト化リ、今ニ至ルマテ焼ケズ云。

【解説】（157～167行）

▽157～163行 標題「釈迦本縁」。仏伝の覚え書き。託胎から初転法輪まで。日本において仏伝經典の受容は古い
が、日本人による文章として伝えられているものとしては『東大寺諷誦文稿』が最古である。奈良時代に作成
された『絵因果経』が有名だが、『東大寺諷誦文稿』には『過去現在因果経』と異なる表現も見られ、仏伝の
出典は一書に特定できないと思われる。

▽164行～165行 仏伝のうち、釈尊が亡母・摩耶夫人のために、忉利天に昇り説法をしたという場面。優填王が
造った梅檀の仏像が、釈尊を迎えて立ちあがって礼拝した。「尺」は、釈尊（釈迦牟尼仏）のこと。47～48行
にも見える。

▽165行 仏が迫害を受けて、乞食をしても布施を受けられなかった時、老人（貧女）が捨てようとしていた腐っ
た汁を、喜んで施食として受けたという説話。『大智度論』卷第八、『今昔物語集』卷第一第十一話などに見ら
れる。説話の標題を「縁」とするのは、『諸経要集』『日本霊異記』などに通じる。

▽166～167行 斜線で抹消。薩埵王子、帝釈天の伝説。

【文意】（157～167行）

釈迦の本縁

(釈迦の前世の護明菩薩は次の生で仏となるために、) 誰の家に生まれるのが良いだろうかと、閻浮提を觀じた。(釈迦族の) 淨飯王は心は清淨で慈悲深く、摩耶夫人は三世の父母としてふさわしい。

護明云。白象云。右脇。七歩。大仙人に占相させる。哭。(釈尊は、劫初から轉輪聖王として相次いで生まれ変わり、転生を終えて最後の世に、三世の人の王の代として生れたという。)

世の中の身分の高い家柄の女たちが、太子のためにこの宮殿に集まった。糸竹(管弦) 云。世の中の高い学才の者たちが集った云。太子は書を読んで、博士に質問したが、わからなかった。太子が教え申し上げた云。

四門云。庭園にいて華を見る云。中夜に城を出た云。四王云。淨飯王は七日間苦しみ心乱れた云。

六年云。沐云。草云。乳云。鉢。菩提樹の下云。(御監) 目代鬼が魔王に申しした。悉達太子は樹下に坐っていた云。魔王がやって来て、本の宮殿に帰るべきだと言った云。

次に、二人の女が太子の身体を洗い濯いだ云。次に、魔王は軍を興した云。地に僻れ腕を転ばし、縛られて動かずに刀杖が折れ碎ける云。成道の後、鹿野園に趣いて、五人の比丘をお度しになった云。

故云。称名。初発より云。轉輪聖王の位を捨てて、出家人道する。天より来る云。誕生高云。清淨出家六云。一丈六尺紫金色、菩提樹の下で仏道を成じた。鹿野園中四云。

仏、忉利天に昇る云。文殊の使云。梵帝が橋を作る云。于闐王云。目連が下り告ぐ云。四天王、天貢物。劫初よりない。像が立って礼する云。

像が釈尊に腰を曲げて礼拝する云。

釈迦仏が、薩埵王子であったときに、虎が七子を産んだところに出会った。虎の親子のために身を投げ出し、地面が赤く染まった。草木も赤く染まった。

壞劫の時に世界は滅失する。成劫のときに本相は失われない。

貧女が腐った汁を奉った縁云。

【語注】（157～167行）

158 閻浮 閻浮提。143行「南州」参照。須弥山の南方にある大陸。インドや現実の人間界全体をさすこともある。

「（聖善白は）下りて当に作仏すべき期運將に至らんとして、即ち五事を観ず（一に衆生の機、二に時、三に国、四に種族、五に父母となるべき者）」（『過去現在因果経』卷第一）。

158 淨飯 淨飯王。『過去現在因果経』などでは白淨王とも。釈尊の父。

158 摩耶 摩訶摩耶。淨飯王の夫人、釈尊の母。45行参照。

158 護明 釈尊の前生の菩薩の名。『過去現在因果経』では聖善白。

158 白象 菩薩は、六牙の白象に乗って兜率天から降りてきた（降兜率）。「爾の時、菩薩、降胎の時至るを觀じ、即ち六牙の白象に乗じて、兜率宮を發す」（『過去現在因果経』卷第一）。

158 右脇 釈尊は、摩耶夫人の右脇から生まれたという（出胎）。「夫人、彼の園中に、一大樹の名けて無憂と曰ふ有るを見る。花色香鮮に、枝葉分布して、極めて茂盛を為す。即ち右手を挙げて、之を牽きて摘まんと欲するや、菩薩、漸々に右脇より出づ。」（『過去現在因果経』卷第一）。

158 七歩 釈尊は生まれるとすぐ、七歩歩いたという。「自ら行くこと、七歩し、其の右手を挙げて、師子吼す」
 (『過去現在因果経』卷一)。

158 大仙人 婆羅門経の聖者、阿私陀仙人。太子が生まれ、浄飯王は、阿私陀仙人に太子の相を占わせた。仙人は、太子が三十二相を具足しており、転輪聖王として四天下の王となるか、または出家して正覚を得るだろうと説いた。「若し在家せば、年二十九にして、転輪聖王と為らん。若し出家せば、一切種智を成じ、広く天人を濟はん」(『過去現在因果経』卷第一)。

158 輪王 転輪聖王。『仏本行集経』に、釈尊が過去世で繰りかえし転輪聖王として生まれて十七の仏に遭ったことが述べられている(卷第一)。

158 世ノ中高キ人ノ女 父王は、太子が出家することを恐れて、城の中にさまざまな趣向を凝らし、太子を楽しませようとした。「又復、五百の妓女の、形容端正にして、肥えず瘦せず、長からず短からず、白からず黒からず、才能巧妙にして、各数技を兼ねるを拵び取り、皆名宝を以て、其の身を瓔珞し、百人の一番、迭たがひひに代りて宿衛す」(『過去現在因果経』卷第一)。

158 糸竹 管弦。糸は琴瑟、竹は笙笛。

159 博士ニ問ヘドモ 原文「博士」。父王は国中の聡明な婆羅門の中から跋陀羅尼という婆羅門を太子の師とした。しかし、太子の質問に答えられず、太子が自ら答え、婆羅門は父王に「太子は是、天人中、第一の師なり」と申し上げた。「爾の時、婆羅門、四十九の書字の本を以て、教へて之を読ましむ。時に太子、此の事を見已りて、其の師に問うて言く、『此は何等の書ぞ。閻浮提中の、一切の諸書、凡そ幾種あるか』。師即ち黙然

として、亦、答ふる所を知らず。又復、問うて言く、『此の阿の一字に、何等の義あるか』。師、又、默然として、亦答ふる能はず」（『過去現在因果経』卷第一）。

159 四門 釈尊は太子であつた時、迦毗羅城の東南西北の四つの門から出遊して、老人・病人・使者・修行者に出会い、世を厭う心を生じて出家したという（四門出遊）。

159 苑 原文「苑」。

159 六年 釈尊は、出家後、六年間苦行を続けた。「爾の時、太子、心に自ら念言す、『我、今、日に一麻一米を食ひ、乃至、七日に一麻一米を食ひ、身形消瘦、枯木の若きあり。苦行を修する、滿六年に垂として、解脱を得ず。故に道に非ざるを知る』」（『過去現在因果経』卷第三）。

159 沐 太子は苦行を終えた後、河で沐浴をした。「即ち座より起ち、尼連禪河に至りて、水に入りて洗浴す」（『過去現在因果経』卷第三）。

160 草 太子が、菩提樹の下で敷いた吉祥草。仏伝の順としては、「乳云 鉢云」の後が妥当。「すなは即便ち、草を以て座と爲したまへるを自ら知るや、釈提桓因、化して凡人と爲り、柔軟草を執る」（『過去現在因果経』卷第三）。

160 乳 沐浴の後、苦行を終えた後、村の少女（難陀波羅）が乳糜（乳粥）を供養した。「時に、地中、自然に千葉の蓮花を生じ、花上に乳糜あり。女人此を見て、奇特の心を生じ、即ち乳糜を取り、太子の所に至りて頭面に足を礼し、以て奉す。」（『過去現在因果経』卷第三）。

160 鉢 乳糜を盛った鉢のことであろう。『仏本行集経』には「金鉢」とある。「見已りてすなは即便ち一つの金鉢を取り、蜜を和せる乳糜を守蓄え、安置してその鉢中に満て」（『仏本行集経』卷第二十五）。

160 菩提下 釈尊は、苦行をやめた後、菩提樹の下に結跏趺坐し、正覚を得るまで立つまいと誓った。

160 御覧目代鬼 不明。『仏本行集経』には、菩提樹を守護していた香獣という夜叉と赤眼という夜叉が、悉達多太子が来たことを魔王波旬に伝えたところある（巻第二十六）。

160 悉達太子 悉達多太子。釈尊の出家前の名。

160 魔王 欲界の第六天に住む魔王。太子が菩提樹下に坐し、成道しようとする時、妨害を試みたが、降伏された（降魔）。

160 本ノ宮ニアル可シ 魔王は太子に、提婆達多が太子の父を牢獄に繋ぎ王位を奪ったので帰ってこいという書状を読み上げた（『仏本行集経』巻第二十六）

161 二女 魔王が太子を妨害するために遣わしたのは三女。『仏本行集経』に、軍将斯那耶那婆羅門に難陀と婆羅という二女があり、苦行を終えた釈尊のところに行き、食を奉り、身体を洗浴したところある（巻第二十五）。

161 軍 魔王は軍を集め、釈尊の成道の妨害をしようとした。

161 鹿野園 中天竺波羅奈国にある、釈尊が成道後初めて説法をした地（初転法輪）。釈尊は、五人（憍陳如・摩訶那摩・跋波・阿捨婆闍・跋陀羅闍）を度した。

162 清浄出家 廣岡義隆氏が、「清浄出家」は『大乘本生心地観経』厭捨品第三に詳しく記され、「在家出家」と區別し、無垢清浄心による出家を「清浄出家」としていると指摘している（「清浄出家」という語から）、『いずみ通信』no.41、二〇一五年七月）。『心地観経』は『東大寺諷誦文稿』に引用や翻案がみられる経典なので、この語も『心地観経』を参照していた可能性は高い（拙稿「東大寺諷誦文稿の成立年代について」、『国語国文』

第六〇卷第九号、一九九一年九月二十五日発行参照。

162 紫金色 仏の三十二相の一、身金色相。

164 切 切利天。

164 文殊の使 出典不明。

164 于闐王 優填王。拘睢弥国の王。切利天に昇った釈尊を慕って、牛頭栴檀の仏像を造った。

164 目連 目連が切利天に昇り、七日後に釈尊が降るであろうことを告げた。

164 橋 釈尊をお迎えするための三道宝階。48行「三道宝階」参照。

164 四天王 帝釈天に使える護法神。東方の持国天・南方の増長天・西方の広目天・北方の多聞天。

164 劫初 出典不明。

165 像尺ニ腰ヲ曲ゲル 仏像が立ちあがって釈尊に礼をしたこと。「尺」は、釈尊（釈迦牟尼仏）のこと。48行

「曲腰仏」参照。

165 腐汁ユスル 「ユスル」は、髪を洗う水。古くは、米のとき汁を用いた。

166 薩埵王子 摩訶薩埵王子。釈迦牟尼仏が菩薩行を修していたときの名。竹林で虎が七子を産んで七日のところに出会い、飢えた虎の親子のために、高山の上から身を投げた。

166 般遮 梵語 *panca* の音写、五の意。こゝで何を指すのか不明。

166 地赤色 薩埵王子が虎のために身を捨て、虎に食われて地面が血で染まった様子であろう。

166 壞劫 四劫の一。四劫は、成劫・住劫・壞劫・空劫。壞劫は、住劫が終わり、地獄の有情が生まれなくなって

から、三災（火災・水災・風災）が起こって世界が壊滅するまでの期間。

166 成劫 空劫が終わり、世界が成立する期間。

167 雑 不明。

167 眷^{スカラ} 「スカラ」は、他の文献に見えない。

167 帝釈 帝釈天。

167 鴿 尸毗王の伝説か。仏が尸毗王として生まれた時、帝釈天は王を試すため、毗首羯磨を鴿に化し、自分は鷹に化して鴿を追った。尸毗王は、鴿をかくまって代りに自らの肉を鷹に与えたという（『賢愚経』巻第一、『菩薩本生鬘経』巻第一など）。

薩本生鬘経』巻第一など）。